

日本語教育通信

国際交流基金 | The Japan Foundation

行・編集 国際交流基金

日本語国際センター

集協力 国際文化交流推進協会



「漁村」

おなじだのに同じでない

漫画・まんが・マンガ 高畑 勲

日本製のアニメやマンガが、良きにつけ悪きにつけ、何かと海外で評判になっています。なぜ日本ではこんなにマンガやアニメが盛んなのでしょうか。

理由はいろいろと考えられますが、そのなかにひとつ、日本人自身もあまり意識していないことがあります。それは、日本でマンガやアニメのようなものが好まれたのは今にはじまったことではなく、ずっと昔からだった、という事実です。

たとえば、すでに12世紀の後半にはすばらしい絵巻物が生まれています。絵巻物というのは、横長の巻紙に言葉と絵を使って延々と描かれた絵物語の一種で、ここでお見せできないのが残念ですが、この巻物を少しずつ繰りひろげながら見ていくと、まるでアニメのように人物たちが生き生きと動き、物語が進んで行くのです。代表作の『信貴山縁起』は、人々の驚きあわてる前で小鉢が米倉を持ち上げ、空を飛び、倉の持ち主たちは馬に乗って必死にその倉を追いかけるシーンではじまりますが、こういう躍動的な場面が時間を追って次々と眼の前に展開し、さ

ながらSF映画を見ているような気分させられます。

以来、浮世絵や大人用の絵本が大量に出版された江戸時代まで、日本人々は、絵と言葉を使って、時間とともにお話をありありと物語るのが昔から大変得意でもあり、大好きでもあったのです。

では、なぜ文字の読める人たちが、こういったものを好んで作ったり見たりしたのでしょうか。その最大の原因は日本語という言語体系にあります。

古代の日本人は、先進国の中国から漢文と漢字を受け取りましたが、固有の「やまとことば」を捨て去ることなく、なんとか折り返合わせようと大変な工夫をしました。それが、日本語学習者を悩ませるに違いない二通りの仮名文字、漢字の音読みと訓読み、漢字仮名まじり文、振り仮名などの発明です。視覚記号と音声記号をいく通りにも重ね合わせて、意味やニュアンスの微妙な違いを視覚的に楽しむこの独特の習慣が、同じように、記号的な絵と言葉を組み合わせて何かを伝え物語る「マンガ的なもの」への好みを大いに発達させたのだと考えられるのです。

本来同じはずの漫画・まんが・マンガを使い分けたりするのも、視覚偏重の日本語ならではのいいありません。

(アニメーション映画監督)